大学病院の緩和ケアを考える会

ニューズ・レター　Vol.29 No.2
令和７年１月１日発行
大学病院の緩和ケアを考える会 事務局
〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8　昭和大学医学部 医学教育推進室
E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org　http://www.da-kanwa.org
編集責任者 高宮有介

○ ご挨拶
○ 第 30 回総会・研究会開催報告
○ 第 11 回授業実践対策参加報告
○ 第 31 回総会・研究会に向けて
○ 学会参加報告
○ クールダウン・エッセイ

ご挨拶「誰かの価値ある行動の変化に寄与する」

代表世話人　高宮 有介（昭和大学医学部医学教育学講座客員教授、TMG（戸田中央メディカルケアグループ）緩和医療特別顧問）

当研究会の節目となる第 30 回大学病院の緩和ケアを考える会総会研究会は、岩手医科大学の木村祐輔世話人を中心に、盛岡で開催されました。テーマは「緩和ケアの教育・共育・協育」。木村世話人の報告にもありますように、岩手医大の看護師共育、専門医療者の育成としての緩和ケア認定看護師課程など、岩手医大が取り組んできた教育の素晴らしさを体感できました。

私は「緩和ケアの言霊を通して、医療人を育てる」と題して、特別講演をさせて頂きました。教育は何かを伝えるだけでなく、「誰かの価値ある行動の変化に寄与すること」と言われています。私自身の教育の原点をお話ししました。

私は高校卒業時、文系志望でした。高校での様々な感動的なイベントの経験から、早慶戦の応援団長になれば同じ感激を味わえるのではないかという単純な動機でした。現役の受験で補欠に入り（結局お呼びはかからなかったのですが）、１，２か月の勉強でこのくらいならと慢心し、一浪でも失敗し二浪へ。失意のどん底でした。その時に出会った予備校の英語教師が運命の恩師でした。

「人は皆死ぬ、私も君たちに教えながら、この教壇で死ねたら本望。だから、今日一日を生き抜くんだ。夜寝るときにこう言えたら幸せ。“I have done my best！”　君達の内には無限の可能性がある。君達は、まだ、気づいていない。どう活かすんだ。どんな人生を送るのか。」私の心に刺さり、この問いかけで、目が覚めました。元々、父親から医師への道を勧められていましたが、医学部受験の大変さから目を背けて逃げていた自分に気づきました。改めて、自分の意思で医師を目指したのです。受験は他人との競争ですが、自分自身との闘いと位置づけ、1 年間を駆け抜けました。

そして、昭和大学医学部に合格し、医師になり、緩和ケア医になる道に繋がったのです。まさに私の行動を変えてくれた授業でした。死というキーワードも力がありました。30 年以上、死から生といのちを考える講義、そして、生まれてきた意味や役割について、亡くなった患者さんが遺した言霊を伝え続けてきました。この一回の講義が誰かの人生を変えるかもしれないという思いを念頭に置き、一期一会の思いで大切に伝えてきました。

小中高校生、予備校生が、価値ある行動の変化に繋がったのでしたら嬉しいです。医学生には、EBM だけでなく、患者さんの物語、人生に関わる大切さ、有難さを伝えてきました。バトンが繋がっていくことを願っています。当会の重要なテーマの教育に立ち戻った機会でした。

第 30 回総会･研究会の特別講演

第 30 回総会・研究会　開催記

当番世話人 木村祐輔（岩手医科大学緩和医療学科）

去る 9 月 21 日、岩手医科大学附属病院にて、第 30 回「大学病院の緩和ケアを考える会」総会研究会を開催いたしました。今回の研究会のテーマは、「緩和ケアの教育・共育・協育」とし、患者さんや

そのご家族が抱える多様な苦しみを支える「援助者の学び」について、参加者の皆様とともに深く考える貴重な機会となりました。

研究会は、４つのシンポジウムと高宮有介先生の特別講演による構成とし、シンポジウムでは、岩手医科大学および岩手県で約 17 年に渡り継続してきた「緩和ケアの学び」を振り返り、その経緯や成果を紹介させていただきました。

シンポジウム１では、「緩和ケアの実践を通じた看護師共育」と題し、岩手医科大学附属病院の緩和ケアセンターと緩和ケアリンクナース会の連携体制について紹介しました。この連携により、基本的な緩和ケアに必要なスキルや知識を深め合うとともに、患者、家族への切れ目のない支援体制の基盤となっています。シンポジウム２では、「緩和ケアにおける専門医療者の育成」をテーマに、当院の「緩和ケア認定看護師教育課程」の歩みを紹介しました。これまでの１２年間で１７３名の修了生を輩出しており、修了生は全国各地で専門的緩和ケアの実践に貢献しています。シンポジウム３では、「緩和ケアの学生教育」に焦点を当て、本学が 2015 年から実施している「チーム医療リテラシー」の一環として行われている、緩和医療における多職種の役割について学ぶワークショップを紹介しました。このプログラムは、医学部、歯学部、薬学部、看護学部の４学部生に加え、歯科衛生士を目指す学生に対し、全人的苦痛の理解と多職種種連携による支援のあり方を学ぶ機会となっています。シンポジウム４では、「地域への進展」として、岩手県内で 17 年間に渡り継続して開催している「岩手県緩和ケアテレビカンファレンス」の概要とその効果について報告いたしました。このカンファレンスは、広大な県土を有する岩手県において、地域の医療従事者が緩和ケアについて学び、地域全体で緩和ケアの質を向上させるための礎となっています。

特別講演では高宮有介先生より『緩和ケアの言霊を通じて医療人を育てる』というテーマでご講演をいただきました。高宮先生からは、限られた生命を懸命に生きようとされた多くの患者さんの言葉から、援助する者の心構えを改めてお教えいただきました。

今回の総会研究会を通じて、改めて当院、および岩手県の緩和ケアの歩みを振り返り、これまでの成果と今後の課題を再認識する貴重な機会となりました。参加いただいた全ての方々、また総会研究会の準備と運営にご協力いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

第 11 回授業実践大会に参加して

三井茉莉絵（昭和大学医学部４年）

以前病院薬剤師として勤務しており、今は薬局薬剤師として調剤業務に従事しております。再受験生として昭和大学医学部に入学してから１年生の頃から毎年こちらの研修会に参加しており、今年で４年目を迎えました。様々なロールプレイを経験してきましたが、ALS の患者さんへのアプローチは初めてのことでした。

改善せず、悪化していく状況の中で疾患理解に乏しい患者に病状の説明をするロールプレイは非常に言葉が詰まりました。全ての症例で必ず最初に告知があり、その告知は必ず患者にとって悪い知らせとなります。まだ改善することのない疾患では次の段階へ状態が悪化する度にその説明をしなければなりません。医学的に難しい内容でかつ患者さんにとって都合の悪い内容を受け入れやすいように説明することは想像するだけで難しいことです。

しかしこの授業実践大会では小グループに分かれてロールプレイを「実践」するため、「難しそう」ではなく本当に「難しい」ことを肌で感じることができました。医師役、患者役、患者家族役のそれぞれを体験することでき、傍観しているだけでは見えてこなかったものを見ることができました。

ロールプレイを始める前は患者へ支持的な共感を示しながら、重要事項はしっかり伝え、平易な言葉を使おうと心に決めて挑みましたが、

実際に始めてみると患者が思わぬ点で病態について勘違いをしていたり、告知を受け入れる気が全くなかったり、自分が平易だと思っていた言葉が伝わらなかったりしました。また、患者が告知を受け入れることができずに、叶わぬ希望を求めてこられた際には宥めるのに必死で言葉に詰まってしまいました。ロールプレイを始める前の脳内シミュレーションとは全く異なった結果となってしまいました。患者本人と家族ではまた立場が異なるため、苦悩すること・葛藤すること・重視することが異なり、またそれは大きな個人差もあることを肌で感じることができました。

グループ内には学生だけでなく現場で働く様々な医療従事者がおり、ALS 患者さんに関わった経験のある方が多かったため、他の参加者のロールプレイをみたり意見を聞いたりするだけでも多くの学びを得ました。演者が変わるごとに様々な医師役がおり、患者との接し方でもどこに重きをおくのかが人によって異なり、型にはまった一つの正解はないのだとも学ぶことができ、貴重な経験を得ることができました。

第 31 回総会研究会に向けて

川崎市立多摩病院（指定管理者　学校法人聖マリアンナ医科大学）
緩和ケア内科部長　森山久美/緩和ケア病棟師長　伊藤優子

2025 年 9 月 27 日(土)、川崎市立多摩病院主催にて、大学病院の緩和ケアを考える会を開催させていただくことになりました。

川崎市立多摩病院は、聖マリアンナ医科大学の分院です。川崎市が建築し、指定管理者を公募、聖マリアンナ医科大学が指定管理者に選出されました。JR 南武線、小田急線の登戸駅から徒歩 3 分のアクセス良好な病院です。本院の聖マリアンナ医科大学とは車で 15 分の距離で、連携がとりやすいところが利点です。当院は 376 床と小規模な病院です。川崎市立の病院でもあり、大学病院と公立病院、それぞれの特色を生かした機能を持っています。小規模なのでスタッフ同士の顔が見えて小回りが利くこと、当院で行っていない治療は本院で行えることが当院の強みです。

当院には緩和ケア病棟があります。川崎市北部には長らく緩和ケア病棟がありませんでした。2017 年 3 月神奈川県がん対策推進計画が策定され、2020 年 6 月に回復期転換補助の意向調査に希望を提出。2021 年に川崎市から要請を受け、一般病棟を改修し、2022 年 5 月に川崎北部 2 番目の緩和ケア病棟として開設しました。大部屋、個室合わせて 12 床です。院内各部署や本院と連携して速やかに症状緩和を行い、自宅に帰ることを目標としています。

次回の研究会では、大学病院の分院としての緩和ケア病棟の取り組みについて焦点を当てたいと思います。臨床面、教育面での本院との連携、分院の緩和ケア病棟だからできること、について、当院での取り組みのほか、近所で同じ立場の昭和大学横浜市北部病院の西木戸修先生、坪谷綾子薬剤師ともコラボ討論する予定です。教育講演には医学教育学会の副理事長でいらっしゃる新潟大学の岡崎史子先生に、最近の医学教育の変化と、そこに緩和ケア教育がどう絡んでいくのか、というテーマについてお話しいただく予定です。ウェブ開催（演者のみ現地）を予定しています。

伊藤師長とシロハラインコのらんらんちゃん

皆様どうぞよろしくお願いいたします。

第 47 回 日本死の臨床研究会年次大会に参加して

中村陽一（東邦大学）

日本死の臨床研究会は我が国の緩和医療関連の研究会ではもっとも歴史のある研究会です。1977（昭和 52）年に第 1 回の年次大会が開催されています。以来、年に 1 回（新型コロナウイルス感染症により 1 回のみ延期となった会があります）の年次大会が開催されています。

札幌で開催された年次大会ですが、多くの参加者をあつめ、わたくしは「事例検討」の座長として参加いたしました。この会の最大の魅力は、「事例検討」にあると思っております。患者さん・ご家族との関わりの中で、発表者が経験した「死の臨床」での経験や悩み、葛藤を事例報告として発表し、それを会場の参加者とともにディスカッションする場になっております。一般的に学会・研究会は臨床がスムーズにうまく行った経験を「症例報告」として発表することが多く、ある意味「チャンピオン症例発表会」になっていますが、この年次大会での発表は「苦労した事例」や「難渋した事例」を報告しております。

まさに、当日その場に参加した皆さんで、演者の経験した「死の臨床」における関わりを追体験し、デスカンファアレンスを行うような心づもりで座長を務めるようにしております。

2025 年度の年次大会は、大学病院の緩和ケアを考える会の世話人でもあられる岩手医科大学の木村祐輔先生が大会長をつとめられ、2025 年 11 月 1 日、2 日に盛岡で開催されます。

今回の事例報告の座長は、山梨県立大学看護学部の前澤美代子教授と担当しました。じつは、2026 年の年次大会を、わたくし（中村）と前澤先生が大会長をつとめ、山梨県甲府市で開催する予定となっております。第 49 回日本死の臨床研究会　大会テーマは「原点回帰　-生、そして死を慈しむ-」としました。「原点回帰」には設立から 50 周年を迎えるこの研究会の原点に今一度立ちかえろうという思いと、「緩和医療」や「死の臨床」に携わる人々がなぜその道を歩もうとしたのか、個人としての原点を見直すきっかけになるような会ができればと思っております。

学会参加報告としながら、研究会の宣伝のようになってしまいました。ただ、わたくしにとって、日本死の臨床研究会では「緩和医療に携わり、死の臨床に関わる医療者としての原点」を毎年考えさせてくれる、とても大切な時間となっております。多くの皆様の参加をお待ちしております。

クールダウン・エッセイ～年末年始の過ごし方～　藤澤陽子（千葉大学医学部附属病院）

2024 年から 2025 年にかけての年末年始、みなさんいかがお過ごしでしたでしょうか？　私は、暦通りの勤務をしておりまして、今年は贅沢に９連休をいただくことができました。９連休だった方も、年末年始関係なく（むしろいつもより忙しく）働いていた方もいらっしゃることと思います。

私はいつも年末のお休みは年賀状書きから始まるのですが、今年は、（おそらく生まれて初めて）休暇前に投函することができました。年賀状はだいぶ減ってきていますが、年賀状だけのつながりもあり、しばらく続けようと思っています。

というわけで、年末のお休みは、大掃除をしました。正確にいうと、大掃除をしようという気持ちを持ちながら日々過ごしました。家の一部はきれいになりました。

そして年越しは実家で迎え、母親の作ったお雑煮を食べました。お雑煮は、地域や家により様々な特徴があるようですね。我が家は、両親が関西の方の出身なので、お餅は丸餅です。子どもの頃はそれが当たり前だったので、家で食べるお餅は丸餅で、スーパーで売っている切り餅が四角いのだと思っていました。ある時、学校でお雑煮を作ることになり、それぞれが家からお餅を持ち寄る機会があり、丸餅を見て驚かれ、そのことに私が驚いたという思い出があります。

年明けには、埼玉県にある所沢航空公園に散歩に行きました。私の実家から車で 30 分くらいのところにあります。数年前に車を手放して以降、年に数回しか運転しないのですが、久しぶりの運転に少し緊張しながら楽しみました。公園についてみると、思ったよりも多くの方々が過ごしていました。ジョギング、ドッグラン、バスケットボール、バトミントンなど様々な過ごし方でした。私が中でも印象的だったのは、凧揚げです。親子で凧揚げをしている方々が結構いらっしゃり、日本の文化もまだ残っているんだなと感慨深くなりました。ただ、売店に行ってみると、凧が売られていたのですが、「カイト」と表記されていて、時代の変化も感じました。羽根つきなどもどこかではされているのでしょうか。

次の年末年始も、暦通りで行くと９連休となります。みなさまどのように過ごされますか？？